

2.7. ヨーロッパアルプス最高峰 Mont Blanc

ヨーロッパ最後の高い雪山となるか

# *「Mont Blanc」*

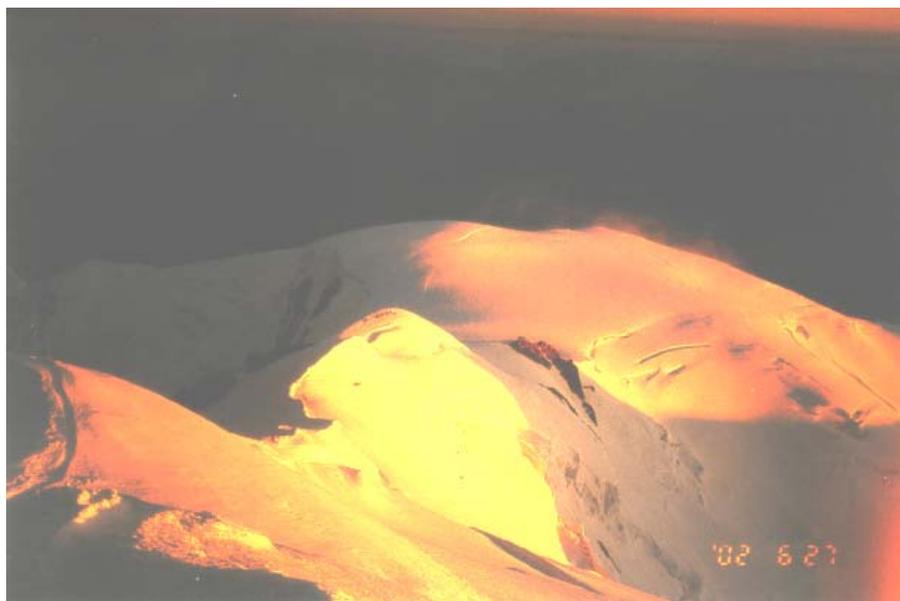
高度：4807m、ヨーロッパアルプス最高峰

日時：2002年6月27日（木）午前5時20分

天候：晴れ、強風、雲量0%

Guide：Alain Desez

Partner: Dominique Laborde



## 下見（二〇〇一年四月）

二〇〇〇年夏私はヨーロッパアルプスの第二峰スイスのモンテローザ（4634m）から帰ってきた。何人かから「次はどこか」と聞かれた。「決めていない」と答えたが、内心はほぼ決まっていた。残るはモンブランしかない。ヨーロッパアルプスの最高峰である。これも「還暦」記念行事の一部であり締めくくりと考えていた。しかし、モンテローザでは疲労困憊したし、この夏のモンブランは天候が不順で頂上アタックがままならず、好天の週末に登山客が殺到して死者を出す事故があったと聞いて慎重にならざるを得なかった。見通しがつくまで計画は伏せることにした。

準備は二〇〇〇年末に始めた。登山情報収集の他に、同行者の募集。この同行者募集の条件は欲張りだったらしい。「日本語か英語とフランス語ができる、山が好き、酒を愛する、体力は同等又は以上、話聞き上手、但し男女は不問」と。ハイキングクラブでも結局見つからなかった。

二〇〇一年四月半ばの復活祭休暇にベースのシャモニを訪ねた。詳しい登山情報を収集して「見通し」を立てることと合わせて中腹までの体験登山をイメージしていた。が、まだ雪が深かった。ジュネーブ経由で昼前に着いたシャモニの街にスキー客が多いのにまず驚かされる。四月のヨーロッパはまだ冬なのだ。訪ねた旅行センターでも山岳協会でも「雪山歩き」を止められる。好天の上空を仰いで落胆の気持ちを抑える。街の中央広場にモンブラン初登頂者の銅像が建っている。その指差す先には文字どおり「白山」の頂上が強い陽射しに輝いている。

翌土曜朝、朝食もそこそこにケーブル駅に急ぐ。登山はだめでも雪歩きはしたい。駅には既に長蛇のスキー客の列。掲示の情報では、上界は好天と言う。列に並ぶ。晴れた空に針峰 Aiguille du Midi の頂き、そ



こにつながる空中ケーブルのワイアが見える。このケーブルの中間駅周辺、標高 2300 ほどのスキー場が「歩き」の目標地点である。終点の頂上付近は高度的にも地形的にもとてもこの時期に素人が一人で歩ける環境ではない。眺望が素晴らしいらしく、軽装の団体観光客も列に多い。が、待つこと小一時間。「上界は風が強いのでケーブルの運転見合わせ、再開見通し不明」の放送。がっかり。気持ちを切り替えて半日コースのハイキングに出掛ける。雪山歩きの

装備での平地歩きである。が、モンブランを正面に眺めながらの快適なコースだ。歩きながら考えた。「こちらの思い出の締めくくりにはやはり登りたいな」「通常ルートは右手の方からだな」とイメージする。昼過ぎケーブル駅に戻ったが、「運休」の表示のみ。明日に期待してホテルに戻る。

日曜朝。「日曜までは好天」との予想だったから、星空を期待して窓の外を見る。未だ暗い。街灯の光の中に小さく白く舞うものがある。それが雪片だと気付くまでに数秒要した。ケーブルは果たして運休。Aiguille du Midi 頂きからの眺望は諦める。が、少しは雪の上を歩きたくてコースを探す。展望台のある Montanvert を目指すことにする。ガイドブックでは電車で行くコースだが、地図上では歩く道も並行している。ただし雪深くなったらいつでも引き返すことにしてかけた。

九時。バスの終点駅から歩き出す。海拔 1100m。スキー客は既に途中で下車している。小雨。路面に雪

はない。アプト式線路を時折横切って次第に高度を上げる。九時半。小雪に替わり、草や乾いた地に薄らと雪が被り始める。十時半、小さな小屋に着く。無人。海拔 1500m。Montenvert まで一時間と標識にある。雪は 20cm ほどになる。が、他のハイカーの足跡が明瞭で心配はない。十一時。足跡が一人分だけになり次第に不明瞭になってくる。新雪で消えつつある足跡を辿ってかなりの斜面の坂道をトラバース。滑落しないよう気持ちが集中する。足跡がますます不明瞭になる。がまだ見える。道は間違っていない。足跡が自分の進むのとは逆の下りであることが多少気懸かり。登り切れない場所があるだろうか。と思って間もなくそんな地点に来た。斜面を四つ足で攀じ登る。いざとなったら下山できる範囲でと心に決めて行けるところまでと登り続ける。再び線路を横切って道の正しいことを確信して前進する。がトレールはもう殆ど識別できない。自分の判断で方向を決めるしかない。雪は時に膝に達する。四つ足で坂を登攀する。十一時半、無人小屋に着く。避難小屋か。その横を通りぬけると斜面が急になる。樹木の間を見やるが先の展望は見えない。ここが潮時かと一旦引き返す。が、諦める前にと地図を見るともう少しの筈。気を持ち直して前進する。ジグザグ。石壁に突き当たる。ストックを上を放り上げて、木の幹を抱えるように攀じ登ると再びトレールが見えてきた。一安心。辿っていくと標識。「右へ小屋」とある。十二時、その小屋。海拔 1900m。暖かいスープと冷たいビールで息をつく。他に客は居ない。楽しみにした現地のみ絵葉書はない。眺望もゼロ。でも満足。帰途の電車は街までわずか二十分。

「本番計画」の決心がつかぬまま夕方再度ガイド協会を訪ねて相談。「モンテローザがやれたのなら大丈夫」と言われて心は決まった。混む季節を避けて、と勧められてシーズン初期の六月末として<sup>1</sup>本格的準備に入った。そう言えば日本の白山にも登っていない。モンブランという銘菓もあるらしいが食べていない。帰国への時間が限られて見えてくるこの時期に格好の目標に見えてきた。成功させたい、これ以上の高い雪山はもうない、人生最後の雪山、と自分の感慨に浸って六月末を待った<sup>2</sup>。

ところが六月に入って間もなく「予定のパートナーがキャンセル、代わりを探す」との連絡。半ばすぎ、断念直前に「新しいパートナーがいた」と聞き、再び気持ちが高まる。ところが三日後「今度は小屋が一杯で駄目だ」と言う。日程を少々ずらせても駄目、結局この年の計画を最終的に諦めたのは六月二十日を過ぎていた。ガイド協会に預けた内金（15000 フラン）は翌年用にキープしてもらうことにした。

---

<sup>1</sup> モンブランでは一人のガイドが登山者二人までを連れて行く。この数はもちろん山の難度に拠る。グロスグロックナーは四人、モンテローザは二人だった。マッターホルンは一人だけと言う。

<sup>2</sup> 家内からは「そろそろやめて」と常々言われていた。ある親しい友人からは「危険な山行」への心配を言われていた。その友人には下見のシャモニから「これが最後の雪山登山」とカードを書いた。

## 本番 (2002.6.24-28)

一年待って「ようやく」本番がやって来た。七月第一週が希望だったが、ガイド協会の勧めでやはり六月最終週 (2002.6.24-28) と決まった。前半の訓練を終えて、最後の 6.28 (金) が登頂予定日である。パートナーはフランス人女性と連絡が入った。昨年のようなドタキャンのないことを願った。予定外のアメリカ出張が六月前半に入ったが、とんぼ返りで帰ってきた。「最後の雪山」に執着していた。からだ作りに不安は残っていた。が、少なくともハイキングで最小限の足慣らし、靴慣らしを一ヵ月あまりしていた。「何とかなるだろう。」

2002.6.21 (金) 予定どおり夜行で出発。ジュネーブでバスに乗り継ぎシャモニ到着は翌 22 (土) 午後六時を過ぎていた。Mont Blanc 頂上は今日もくっきり見える。

2002.6.23 (日) 快晴。去年行けなかった Aiguille du Midi に早速ケーブルで登る。中間駅 (2300m) で乗り継ぎ 20 分で頂上駅 (3840m) に着く。

眼前に Mont Blanc が迫ってくる。頂上に人らしい点が見える。こんな快晴で登頂日を迎えたいな。展望台から見下ろす雪原には登山客、下山客の列がいくつも見える。自分たちの登山予定ルートの方角を見る。泊まる小屋はこの展望台とほぼ同じ高度 3800m のはずだ。「下山ルートになるかも」と案内に書いてあった Bossons 氷河を見下ろす。かなり注意が要りそうだ。「あれが Monte Rosa、あれが Matterhorn」と日本人団体に説明するガイドの声に振り替えると、見える、見える。「実は二年前にあそこに登った」と思わず言いたくなる。



一時間ほど景観を楽しんで下山。中間駅からは歩くことにする。去年雪の中を一人で登った Monteners を経由する。今回は花あり、美しい山ありの快適な道。去年雪で苦労したのはこの辺かな、と思い出しつつ下山。三時過ぎホテルに戻る。

夕刻、協会でガイド、パートナーと会い、こちらの登山歴を説明し、用具、日程を打ち合わせる。ガイドはアラン。日本人を妻に持つ。説明に日本語も入ってくる。技術的には何とかなりそうだが、今日のような快晴に恵まれるか。

2002.6.24 (月) 四時過ぎ目覚めると山に厚い雲、心配していると八時過ぎなんと雨。これなら週後半却って好天か、と楽観したいが。

今日は体力チェックと基礎的な雪上歩行訓練。訓練だから景観には拘らないが、雨は困る、と心配しつつケーブルで谷を隔てた反対側の山 (2500m) へ。歩きはじめの九時には時に弱い日差しもあったが、雷鳴が轟き、やがて本格的な雨。縦走は諦めて高度を下げる。歩き続けるうちに雨はあがったが、単なる体力チェックは楽しくはない。場所を代えてケーブルで再び高度 2400m まであがる。携行ランチを頬張っているとまた雨。「もう今日はやめるか」とすらアランが言う。でも少しは雪の上を歩きたい。小止みになったのを機に歩きだす。幸いこのあと雨はこず、今日本来の往路コースを逆に辿って今朝のケーブル中間駅に戻る。日差しが戻り、Mont Blanc の頂も少し顔を出しそうである。四時過ぎホテル。明日は集合午後

の二時。モンブラントンネルへのトラック通行反対で町中がデモをする。ガイドのアランも参加するので訓練は午後からと言う。その分夜が遅いのが困るけど、夜は皆でフォンデュ食べようと誘ってくれる。

2002.6.25 (火) 曇り。朝から山は厚い雲の中。中腹までしか見えない。天気予報は悲観的。宿の壁情報では肝心の(木)午後から(金)にかけては嵐すらとある。ひよっとしたら登れないかもしれない。

朝食後町へ出ると大きなデモ行列。子供もプラカードを持ってお祭り気分。列の最後尾にアランを見つける。どこまで歩くのか。トンネル入口まででも行くのかな。昼のニュースでやっていた。

午後二時、晴天の中を「雪上歩行訓練」のため Bossons 氷河へ。斜面登降の基礎技術等。途中の氷上に風雨に曝されて点在している繊維質状の人工物をアランが見つかる。ビニール袋に回収している。尋ねると墜落機の残骸。1966年のインド航空機だと言う。二時間あまりの氷河散歩のあと反対側の山道を降りる。下界直前の山小屋でフォンデュまがいのチーズ料理 Reblechonade で晚餐。Reblechon という名のチーズを溶かしてポテトにかけて食べる。添え物の生ハムと酢漬けのらっきょうがが美味しい。アランは合間に天気予報、登山電車の時間を携帯で調べて「計画を早めて明日から登ろう、明日(水)から(木)昼までは好天のようだ、うまく行けば明日中に頂上」という。計画ではアタック前に高度順応のための Mt. Blanc du Tacul (4248m) 登山があったのにそれを省略して直接登るとするのは、天候に加えて仲間の登山歴、技量を見ての案だろうが大丈夫か。

2002.6.26 (水) 快晴。五時窓から見上げる空に雲はない。明日一杯もってくれ、と祈る。アイゼン、食

料、水、カメラ2、衣類でリュックが次第に重くなる。迷ったが携帯は宿に残す。さらに借り物のアイスピッケル、安全ベルト、ヘルメットが加わる。登山口への電車は始発でも到着11時。頂上までは標高差2500m、決行するなら山小屋帰着が深夜近くになる。明日の好天を祈って待つのが常道だが...。ケーブルで登山電車の中継駅に着くと、「初電は満席、30分後の臨時便を待て」という。すでに遅れ。



その臨時便が途中で車両故障。結局歩き始めは正午近い。

岩礫の多い道を二時間、Aiguille du Gouter の Tete Rousse 小屋。3167m。一服して先へ進む。アイゼン、ロープを着けて出発。アラン先頭、私が殿。小さい雪渓を横切ると岸壁登攀が続く。直登600mで目指すGouter小屋は上方視界にあるのだがなかなか手に届かない。相棒のドミニクも疲れてきたようだ。午後五時半、その小屋に着く。標高3817m。「体力的より精神的に疲れたね」と顔を見合わせる。「今から頂上目指すのかな、天気は確かに良いけど」と訝る。「今日はなし、明日早くにしよう」とのアランの言葉に安心してビールを注文。マッシュポテトとハムの夕食を済ませ、「深夜起床、一時までには出発、時計係は俊雄」と決まって小用後七時鳩小屋へ。多くの登山客で食堂は満員。予約のお陰で一応はベッドで眠れる。八時過ぎ、「また小用か」と起きだしたついでに大用も済ませます。これで明朝の行事が一つかたづいたなど

安心。が、高度の所為か時間が気になるのかしきりに目が覚めて眠れないまま深夜を迎える。

2002.6.27 (木) 快晴。零時前「ドミニク」と小声で呼ぶと「ウィ」。既に目覚めていたらしい。荷物を持って玄関へ。食堂は溢れた宿泊客が寝袋で占領している。別室のアランも起こす。零時半、アイゼン、ロープ、ヘッドランプを着けて出発。アラン先頭、私が殿。空に星。「満天」には今一つだが天候は良いと安心。やや風はあるが問題ではない。以下高度計記録を足掛かりに行動を辿ると...

二時過ぎ、Dome du Gouter (4304m)を左から巻くように通過。三時過ぎ、Vallot 小屋(4360m)前を通る。手足の先が冷たい。この頃から月明かりで歩けるようになり、額のランプを消す。身体に疲れは感ずるが懸念した高度症は感じない。息切れもない。「あれが頂上か」と思わせる点をいくつも越えるが、越えるともまた先に次の頭が見えてくる。大ボス 4547m、小ボスの小ピークを越していよいよ最後の狭い尾根筋を歩き続ける。強い横風に吹き飛ばされそう。時折立ち止まって安定を確保する。気が付くと前後に登山者は少ない。朝早い所為か。



五時二十分、その頂上。予想したクロイツも標識もない。狭い登山路からは想像しにくい頂が広々としている。大きな禿頭が雪を冠っているようだ。中天に満月か。風が強い。立っているのが不安定である。アイスピッケルを雪上に突き刺し、リュックを確保する。雪面に腰をおろす。カメラを取り出そうとするがむつかしい。アランの「やめろ」と言う声も風に飛ばされていく。まだ夜明け前。空に雲はなく、全方向に薄暗い山稜が広がるが、残念ながら自分では各ピークの名が識別出来ない。アランの説明も耳に届かない。二年前、頂上からこの山を遠望したスイスの Walliser Alpen やイタリアの Gran Paradiso (4061m) も見えるはずなのに、もう一、二時間遅めの登頂が良かったか、と贅沢な悔い。「最後の高い雪山」と内心決めて二年越しでやって来た山にしては感動が薄い。Kilimanjaro の感動が今なぜないのか。寒いせいか、自分の言葉で感動を交わせる相手がいないせいか。

約五分居て下山開始。Bossos 氷河へのルートは取らず、来た道を引き返す。下りは私がザイルの先頭。リッジを降り切り、風の弱まったところで写真。日の出直後。モルゲンロートに輝く山容が美しい。日中の「紺碧」とは異なる美しさ。この美しさを伝えたい友の顔が浮かぶ。登頂記でこれが伝えられるだろうか。決心が本物なら、この靴もアイゼンもお役が済みつつあるな、靴は手入れをして部屋に飾るか、と先を考える。思えば最初の雪山は新橋の山岳同好会「シャモニ」の仲間と二十五年ほど前に登った五月の穂高岳だった。あの時もこの靴であり、このアイゼンだった。そこで雪山の美しさ、楽しさを知ったのだ。そのシャモニが最後の雪山登山のベースになるのも因縁かも知れない。



約五分居て下山開始。Bossos 氷河へのルートは取らず、来た道を引き返す。下りは私がザイルの先頭。リッジを降り切り、風の弱まったところで写真。日の出直後。モルゲンロートに輝く山容が美しい。日中の「紺碧」とは異なる美しさ。この美しさを伝えたい友の顔が浮かぶ。登頂記でこれが伝えられるだろうか。決心が本物なら、この靴もアイゼンもお役が済みつつあるな、靴は手入れをして部屋に飾るか、と先を考える。思えば最初の雪山は新橋の山岳同好会「シャモニ」の仲間と二十五年ほど前に登った五月の穂高岳だった。あの時もこの靴であり、このアイゼンだった。そこで雪山の美しさ、楽しさを知ったのだ。そのシャモニが最後の雪山登山のベースになるのも因縁かも知れない。

登り来る登山者と挨拶を交わしつつ下山。七時半過ぎ小屋に戻る。しかし、まだ下山は続く。しかもこの小屋から下の岸壁下りは注意が要る。ここまで来て事故には遇いたくない。雪山遭難な

らともかく、岩壁滑落ではみっともないし。朝食代わりにスープを胃に入れて八時半過ぎ岩壁を降り始める。先頭はドミニク。二時間弱で降り切る。これでようやく一安心。アランとドミニクは早目の登山電車に間に合わすようにと雪面を直滑って先を急ぐが、疲れ半分、まだ好天のつづく景観見たさ半分で私はマイペースの一人下山を選んで昨日登って来た道を逆に辿る。登ってくる登山客に出会う。「モンブランか」と聞くと「ウイ」とにっこりする。標高差 700m を一時間あまりで駅に着く。彼らの電車は 10 分前に出ていた。

次の電車まで一時間あまり。駅脇のレストランでビールの一人祝賀パーティ。頂上への道、頂上での情景を思い出していると、今まで登った色々な山の風景が思い出される。グロスグロックナー、モンテローザ、グランパラディーソ、そしてタンザニアのキリマンジャロ。その他オーストリアの多くのピーク。日本の山も脳裏に蘇ってくる。日本に帰ればもう 4000m 級の高い雪山に登ることもないだろう。楽しかった。



いろんな雪山が臉に浮かぶ。もうこの靴を履くこともないかもしれない。感慨が心を埋める。一時頃雨。「木曜午後から天候悪化、嵐かも」との予報があたり始めるのか。これからの登山客は大丈夫か。今日の登頂に感謝する。高度順応の準備もないままのいきなりアタックだったが、無事目標は達成できた、と頂上での情景を思い出す。電車、ケーブルを乗り継いで下界に着くとアランが車で待っていてく

れた。夕方六時、ガイド協会できさやかな登頂祝賀会。陽は差しているが山の頂には雲、時に雨。上はやはり嵐か。

(土)の夜行寝台が変更できるなら早めにウィーンに戻るか。しかしここはフランスの田舎。切符はスイスのチューリッヒからオーストリアのウィーン行き。案じたとおり、「手続き不可能」の返事。とにかくジュネーブまで行ってから相談と明日朝早くのチェックアウトをホテルに依頼。「モンブラン印のビールで最後の晚餐」意図は魚料理が今一で残念。

2002.6.28 (金) 雨。朝、まだ暗い路面を雨が叩いている。見上げても山は厚い雲の中。雷も鳴っている。昨日登って正解だった、今日の早帰りも正解だ、この天気では一日ハイクも無理だ。幸い、バス駅までの五分、ジュネーブでの鉄道駅までの五分間は雨は小止み。ジュネーブ駅の切符売場で簡単に寝台取り消し、座席指定券を取ってくれた。手数料4ユーロ程度。チューリッヒ駅地下で立ち食いの中華はその払い戻金が役立った。ウィーンまでの九時間あまりは長旅だがワープロたたいて既に三時間が経過した。窓から見上げるオーストリアの山も雲の中。